

第40回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 和氣 節子

このたび会員の皆さまのご支援をえて、英文学科卒業生、大学院生、大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の促進を目的とする、英語英文学会 (KCSES) は節目の第40回目を迎えることができました。今年度は英米文学・文化コースが学会準備を担い、例年同様11月の最終金曜日に、東京大学名誉教授、平石貴樹氏をお迎えし、特別講演「早わかりフォークナー」を拝聴いたしました。

平石先生は、20世紀アメリカ最大の小説家、フォークナーの魅力といえる、「強情な人物たちの極限状態を派手な筋立て」で表現する「モダニズム的手法」の特徴を、実際の作品からの多くの引用例を用い、また夏目漱石や芥川龍之介の文体との比較も交えながら、ご説明くださいました。平石先生ご自身が、東京大学をご退官後の現在、探偵小説のご執筆に集中しておられるためか、各作家独自の表現手法のご指摘は、まるで彼らの狙いを代弁されているかのようで刺激的でした。その場にいた学生、院生から、フォークナーファンのみならず、小説家平石ファンも増えるであろうことが大いに予測できる、貴重なご講演でした。

学会前半部では、本学大学院文学研究科、博士前期課程修了生2名が研究発表を行いました。各々の発表タイトルは、佐藤花奈氏（英語学コース、GE130、現、兵庫県立高砂高等学校 常勤講師）“An Underspecified Tense in Jamaican Creole”と、豊島知穂氏（通訳・翻訳コース、GE132、現、関西外国語大学 非常勤講師）「下訳修正における誤りカテゴリーは、学習者レベル別によりいかに異なるか」でした。両者とも熱意のこもった意義深い研究成果発表で、今後の益々の研究の発展を感じさせる喜ばしいものでした。

当日、ご参加くださった旧教職員、並びに他学科の先生がた、KCSES会員の皆さまに御礼申し上げます。来年度はグローバル・スタディーズコースが学会準備担当となります。また英文学科では2017年度より新カリキュラム実施を予定しており、次回のKCSES大会後の懇親会などでも、より多くの皆さまにご説明し、ご意見を頂戴できますことを願っております。

特別講演

『早わかりフォークナー』

東京大学名誉教授 平石 貴樹

20世紀アメリカ最大の小説家として知られるフォークナーは、他方でまた、難解な作風でも知られる作家でもある。ましてや「小説離れ」が進んでいるらしい今日、若い人たちがフォークナーを熱心に読みふける光景は、ほとんど見かけられないように思われる。そこで、フォークナーを崇拝する私としては、学部生、院生諸君に語りかけることのできるこの機会に、フォークナーの魅力を大づかみに解説し、ファンを少しでも増やそうと努力してみることになった。

もとより作家の魅力は、魅力的に語らなければ意味がない。その点には自信がないが、その代わり、注目ポイントを数点に絞って、なるべく丁寧に例を出しながら話を進めたつもりである。そのポイントのいくつかは、「派手な筋立て」「強情な人物たち」など、アメリカ小説全体に広く見られる特徴でもあり、また別のいくつかは、「極限状況」「世界の異なる人物たちの描き分け」など、国籍や時代を問わない、すぐれた小説がたいてい備えているような特徴でもある。つまるところフォークナー作品は、アメリカ小説や小説一般についてさまざまな発見や納得を与えてくれる、小説というジャンルの秘密を満載した貯蔵庫のようなものでもあることが、最大の魅力であるということになるかもしれないという結論に辿り着いた。



困ったのは、いわゆる「モダニズム」の手法である。これは小説が（というより文学そのものが）、単なる「お話=物語」ではなく、「表現」でもあるという問題関心を理解していないと、とても短い時間で説明しきれものではない。あらゆる種類の「物語」にあふれた現代の若い人たちが、つまづくのはおそらくこの点だと考えられ、そうなると肝心のところで、フォークナーの「早わかり」はできない相談になりかねないのだが、そこは難しさを率直に認めた上で、魅力に免じてこの問題関心にぜひチャレンジしていただきたい、という趣旨の注釈をはさむにとどまらざるをえなかったことを告白しておきたい。

発表要旨

An Underspecified Tense in Jamaican Creole (JC)

佐藤 花奈

兵庫県立高砂高等学校 常勤講師
(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学
専攻博士前期課程 英語学コース修了)

I concluded that there is a system that determines an underspecified tense position in JC. Native Consultations are conducted in order to find out what is significant in determining tense interpretations. I propose that an order of precedence determines tense, and I construct tree diagrams including a default TP.

I use little *v* which has semantic feature having possibility to involve in syntax. If checking *uninterpretable features* in the tree in my study is true, it supports JC and other languages to have TP.

I want to add this classification to *the directional verbs* and *the process verbs* has the possibility to have [uPAST] features. JC sentence has at least one tense feature in any categories for tense interpretations. If the sentences have no tense indicators, JC speakers determine its tense regarding as the distinction of verbs in detail, specificity of objects. Some semantic influences tense interpretations.

I had a great time to give a presentation and to have such a good question and answer session.

発表要旨

An Analysis of Error Categories in Learners of English-to-Japanese Translation

豊島 知穂

関西外国語大学 非常勤講師
(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学
専攻博士前期課程 通訳・翻訳コース修了)

質の高い翻訳文章作成において、修正というプロセスが必要不可欠であることは広く認識されている。一方で、そうした誤り修正に関するデータの蓄積と共有は進んでおらず、学習者のレベルに応じた誤りの特徴やパターンについての知見も翻訳研究において十分なされていない。

本研究の目的は、下訳の誤りカテゴリーが翻訳学習者のレベル別でいかに異なるのか検証することである。加えて英日翻訳において有効な誤りカテゴリーを調査し、翻訳養成や翻訳教育に役立てることを目標とする。

誤りカテゴリーについてはMeLLANGE誤りカテゴリーを出発点に、英日の言語対を考慮し、修正した16の(MNH-TT)誤りカテゴリーを使用した。

結果、この実験を通して99%の誤りを分類することに成功した。加えて、学習者レベル別による調査では、初心者が原文を理解する過程でつまづく傾向にある一方、上級者は訳文を表現する過程で不適切な語句を選ぶ傾向にあると判明した。今後の課題として、より幅広い学習者間での調査及び未確定エラーの分類が残されているが、この研究を通して翻訳学習者間における誤りの相違、MNH-TT誤りカテゴリーの有用性が証明された。

国際学会発表

*足立賀代子 氏

“The Structure of Praise: The Faerie Queene in the Convention of Praise Poetry”

アイルランド, Dublin Castleで開催されたSpenser 2015 (2015年6月18日-20日)にて研究発表。

*Shawn Banasick 氏

“Food Security In Japan And Perceptions Or Risk: An Examination Of Consumer Attitudes”

USA, Portland State University,で開催されたTwelfth International Conference on Environmental, cultural Economic, and social sustainability (2016年1月21-23日)にて研究発表。

***石川有香 氏**

“Japanese English and ‘Communicacy’ of Japanese LFE Users”

中国、北京国際コンベンションセンターで開催されたELF8(The Eighth International Conference of English as a Lingua Franca) (8月25日-27日)にて共同研究発表。

***高 雅妃 氏 (本学大学院生)**

「心的距離による同意語・類義語の使い分け研究：日本語・韓国語副詞に焦点をあてて」

国立国語研究所で開催されたNINJAL International Symposium: Grammaticalization in Japanese and across Language (NINJAL 国際シンポジウム「文化化：日本語研究と類型論的研究」) (2015年7月3日-5日)にて研究発表。

***古村敏明 氏**

“Sharon Olds’s ‘Photograph of the Girl’: the Identity-Assertion of the Dead”

カナダ、トロントで開催された Northeast Modern Language Association, 46th Annual Convention (2015年4月30日-5月3日)にて研究発表。

***小杉 世 氏**

‘Empires, Culture and Memories: Lemi Ponifasio’s Planetary Imagination and Performing Arts in Oceania’,

Australia, University of Viennaで開催されたThe 21st Annual Conference of the New Zealand Studies Association (2015年7月1日-4日) (Keynote)にて研究発表。

***奥本京子 氏**

“Weaving the Tapestry of Peace and Nonviolence: Peacebuilding and Efforts of Reconciliation in Northeast Asia and Beyond”

香港で開催されたThe 11th International Expressive Arts Therapy Association Conference (2015年10月8日)にて共同研究発表。

“Arts-Based Approach to Peacebuilding and Transforming Historical Conflicts”

香港で開催されたThe 11th International Expressive Arts Therapy Association Conference (2015年10月9日)にて研究発表。

“Nonviolent Intervention by the Means of Facilitation and Mediation”

北京で開催された日中平和研究共同セミナー、察哈尔ラウンドテーブル (2015年10月31日)にて研究発表。

***立石浩一 氏**

“Natural Speech Perception by L1 and L2 Speakers of English.”

University of Illinois at Urbana-Champaignで開催されたETAP (Experimental and Theoretical Advances in Prosody) 3 (2015年5月28日)にてポスター発表。(Gábor Pintér, Shinobu Mizuguchi, Jennifer Cole, Tim Mahrtとの共同研究)

***鶴野ひろ子 氏**

“Emily Dickinson and Japanese Flowers”

米国Philadelphiaで開催されたSociety for the Study of American Women Writers Triennial Conference “Liminal Spaces, Hybrid Lives” (2015年11月4日-8日)にて研究発表。

***和氣節子 氏**

“Contemplating Genius: Coleridge on Shakespeare”

京都ノートルダム女子大学で開催されたColeridge and Contemplation (2015年3月27日-29日)にて招待発表。

***吉田純子 氏**

“When Marnie Was There: An Autistic Girl’s Habilitation”

イギリス、University of Worcesterで開催されたInternational Research Society for Children’s Literature 22nd Biannual Congress (2015年8月9日)にて研究発表。

***Corey Wakeling 氏**

“Towards a Radical Tohoku Pastoralism”

Aomori Museum of Artで開催されたPSi Tohoku: Beyond Contamination(2015年8月28日-9月1日)にて研究発表。

上記同会場で開催されたPSi Tohoku: Beyond Contamination(2015年8月28日-9月1日)にて研究発表。(Working group report: Performance)

会員による出版紹介

◇相本資子 氏

『ドメスティック・イデオロギーへの挑戦——
19世紀アメリカ女性作家を再読する』（単著、英
宝社、2015年4月刊）

◇風呂本惇子 氏

『クローテル 大統領の娘』（ウィリアム・
ウェルズ・ブラウン著（単訳、松柏社、2015年
2月刊）（全）297頁（解説も含む）

◇東森 勲 氏

『メタ表示と語用論』（東森勲編、開拓社、2015
年3月）
『最新英語学・言語学用語辞典』（東森勲編者
＜語用論＞、開拓社、2015年11月）

◇古村敏明 氏

“Robert Hayden’s ‘Sphinx’: An Allegory Ex-
pressing the Inexpressible.” *The Explicator*.
73:4 (December 2015): 296-300.

“Revisiting Janice Mirikitani: a Search for
Unencumbered Aesthetics.” *Colloquies. Arcade*:
Stanford University, 2 July 2015. Web.

◇Corey Wakeling 氏

“Anxiety and Antigone: an Introduction to Gig
Ryan’s *New and Selected Poems* (2011).” *We-
sterly*, 60 .2 (2015): 34-47.

“Sleeplessness in Sleep: Beckett’s Gestures of
Dream.” *Performance Research* 21.1 (2016): 43-
49.

詩作

“Agora, Arcadia.” *Overland* 220 (Spring 2015): 80.

“Elegy written in a dead metropolitan library.”
Meanjin (Summer 2015): 105

“Hood Wink.” *Writ Poetry Review*. 3 (September
2015): n. pag.

“Lingo Surprise.” *Cordite Poetry Review* 50
(2015): n. pag.

“Quad.” *The Age*. (3-4 October 2015): 30; *The
Sydney Morning Herald*. (3-4 October 2015): 30.

“Reactor of the Tiny Minutes.” *Island* 142
(2015): 108-109.

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトの
コンテストを開催することとなり、今年度も担当
教員からの推薦による応募を受けつけた。全体で
は15名の応募があり、2月に英米文学、英語学、グ
ローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門で
選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は
次の通り。なお、最優秀者の論文は、『優秀卒業論
文・プロジェクト集』（2016年度春刊行予定）に掲
載する。

英米文学（応募者数 2名）

<最優秀賞>

E12095 溝口 彩香

<優秀賞>

E12137 鳥田 彩乃

英語学（応募者数 3名）

<最優秀賞>

E12140 下郡 菜里

<優秀賞>

E12039 本多 葵

E12069 川上 紗誉

グローバル・スタディーズ（応募者数 8名）

<最優秀賞>

E12002 秋間 梓

E11133 辻 愛子

<優秀賞>

E12112 西村 真由

通訳・翻訳（応募者数 2名）

<最優秀賞>

E12083 黒田えみま

<優秀賞>

E12070 河本 歩佳

記念賞

2015年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカット記念賞 E13056 嘉藤 萌

デフォレスト記念賞 E13057 加藤 夢乃

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月 22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、K C S E S 運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費 500 円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に 500 円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3) に関しては、K C S E S 専用の口座を利用する。



編 集 後 記

よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSESとして新たなスタートをきって以来、無事5年が過ぎました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしくお願ひ申し上げます。

会員国際活動報告・出版物のご連絡、ありがとうございました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々のご研究のご発展をお祈りいたします。

*KCSES Newsletter*編集委員

(2015年度運営委員)

○高村峰生 ○Goran VAAGE ○和氣節子 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 31

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2016年3月発行